バットメモリー

木山緋菜

塩辛い羊水に浸った右足。
流れ着いたものたちの欠片が少し痛い砂浜で、
真っ赤に染まったテトラポットは、こんな形をしていただろうか？
落ちた日を飲み干した大きな胃袋は流星を映して、今度はてらてらしたそれを食べるのだ。
一等星のテトラトンは、まだ落ちてこないはず。

鏡に似た水面は、本当に水銀だったら死んでしまうけれど。
水しぶきみたいに散って舞ったら悲しいだけでしょうと、囁いた人が居たのを思い出す。
中指にはめたアメジスト色の指輪と、花冠を結ぶ人差し指。
二人分のショートケーキと、重ねても鳴らないコーヒーカップ。
嘘つきの小指。

テトラトンは、クリスマスツリーのてっぺんの星によく似ていて、東の空に乗っかっている。